

現場
実習
記録

ケ

ー

ス

記

録

四年 四月 山 洋 子

児童名 N・A 長男 十七歳十一月
通告者 父

主 訴 教育相談

問題発生と経過

昭和三十一年十一月二十日、S署より窃盗で書類通告があつた本児の弟のことについて来所した父と面接中、八年前母が病死し以後男子のみで四人の男児を養育して来たが家庭教育上困難を来している事が明らかとなり、殊に本児に手をやいている父の訴えて扱うに至つたのである。

受付の控室に金ボタンの制服をきちんとつけ油気のない長髪を後へなで乍ら何か分厚い本を読んでいる本児が中年婦人の多い室の中で目立っている。

I (傍へ歩み寄り乍ら)「あAさん?

早かつたわね」

A (顔を本からはずして見あげるよう

に)「あつ、ええ」とにつこり本を開きす。
I 「あの弟さんのことで、お話したいんだけどむこうに来て下さる?」

A 「ええ、行きます」(私が先に歩き乍ら)

I 「今日すごく寒いわね、電車で来たの」

A 「そうです。ずつと……」

I 「T君(弟Ⅱ三男で書類通告)と一緒に」

A 「ええ、だけど弟は別の先生が先刻呼んでそこへ行つたんです」

I 「ああそうなの、じゃ一人になつて退屈しちやつた?」

A 「ははあ(笑つて)別に……」こんな

事を話しているうちに面接室に来る。点灯してドアをあけて入り彼を招き入れ円テーブルに相對して腰かける。

I 「何読んでいたの?……」(笑つて答

えず)

I 「熱心によんでたじゃないの、なに?」

にこにこして私に彼は分厚い本の表題のところを開いて見せる。『ジャズへの道』と云う邦訳された本である。

I 「昨日ねお父さんにお会いしたんだけど何かきいた?」

A 「ええ、あの弟の事でしよう?」

I 「ううん」と首肯く。すると彼は弟は下手人でないこと、仲間に悪い奴がいること、今のアパートは戦災者、引揚者のみで環境が悪いことなどをポツポツ話し乍ら弟を弁護する。

I 「アパートはうるさい?」

A 「ええ、うるさいつて言うよりもガラがわるいんですよ」

I 「そうお、幾世帯位いるの」

A 「ええと、二十幾つかな」

I 「それで君達のいるところどのくらい」

A 「八畳と三畳です。それにうちだけ倉庫、階段下のね、それを使つてる」こんな話をしてるとだんだんに彼の緊張した表情がほぐれて来て、父親の言う強情さはあまり感じられず、昨日私が作つた彼のイメージがかなり違つた形に作りかえられて行く。

I 「A君音楽がうまいんだつてねエ」

A 「ハハ、それほどでもないんです」--につこり微笑む。

I 「一番好きなのはジャズ？」

A 「そう、やつぱりジャズだなあ」

I 「そんな本（指さして）なんかよんでるところを見ると、ずい分系統的にやつてるんでしょ？」彼は即座に「そうだ」と答え、そして一生懸命やつてゐるんだが親爺が反対するので困つてゐる事を話す。

I 「ねエ、お父さんどうして反対するの」

A （無言で下を向き一寸考える様子）

I 「ね、A君お父さんどお思う？」

A （首をかしげ乍ら）「ものわからぬ頑固おやじつて言うのかなあ」（笑う）「すごい強情で一度言い出したらきかないんだ」

I 「おじいちゃん、まだ川崎かにいらつしやるんだつて？」

A 「うん、そうらしいや、だけどねオヤジと合わなくて全然会つた事ないな……」

I 「あのA君達四人ね、兄弟仲はどう？」

A 「ハハ、よい方じゃない」

I 「ふうん、あのA君はさ一番上でお兄さんだけど下の三人の弟の中で一番かわいのはだあれ」

A （即座に）「Tです。今日一緒に来た。あれは夕食の準備だつて全部するし朝も早く起きてくれるし、あいつが一番かわい

い……」

I 「そうお、昨日お父さんもね、T君がよく台所をしてくれて助かるとおつしやつてたわ……じやね、皆T君を大事にしてかわいがつてゐるの？」

A 「ううん、そうじやない、オヤジはもう僕の下の弟をものすごく頼りにしてゐるんだもの、何でも弟に相談してゐるし、あいつには一目おいてゐるから……」

I 「一番上のお兄ちゃんやあなたに話さないことでも？」

A 「ううん（強く肯定）僕なんかそつちのけだ……」こんな話から本児は次男Nに對してインフェリオリティコンプレックスを抱いてゐる事、そしてその故に一層父

に反抗することがはつきりして来た。その原因はNが成績もよいのに比し、自分は高校を中退したりなど、親爺の氣に入らぬ事をしたからだと本児自身が語つた。

I 「高校は昨年まで行つてたんでしよ

う」

A 「そう昨年五月に休学することにしたんだけど……」

I 「学校面白くないの？」

A 「ううん（否定）面白くないこともないけど僕音楽やり出したでしよ。だから時間がなくなつたんで……」

I 「ああそうね、昼はお勤めだしね。でも休学だから又いこうと思えば復学出来るわけね」

A 「そう……やつぱりいこうかなあ」

I 「折角一年以上も行つたんだし、もう一息で卒業だものね」

A 「ううん、僕ね来春から二年に編入さしてもらおうかなあとも思つてるんだし」

音楽の方は先生についてるんじやなくて神田のクラブへ月四回行つてる事や五千円位費用のゐる事、自分の月収でそれでも賄つてゆけることを話す。

I 「楽器をやつてるんでしよ」

A 「ええ、吹奏樂の方」

I 「やつぱり自分で一つもつた方がい

い」

A 「だからね（眼を輝かせてノリ気で）僕どうしても欲しいと思つて、小遣いをためて、自分の時計迄売つてようやく買ったんですよ、今年の春にね」

I 「そう、大変だつたわね、でも自分のものとしてもつのでうれいしでしょう」彼はコクリと背きニコニコしている。昨日父親が買つてくれと云うので腕時計を買いとつてやつたと云つた事実を一致した。

I 「ずい分した？」

A 「あのね、二万円と一寸、中古で」驚くようにその苦勞を理解している態を示す私に、彼はいささか満足したらしくかなり能弁に父が無口と云つた事実を否定する如く話し出す。

A 「オヤジはね、僕が音楽をやるとすぐ、『そんなものは何万人に一人しか成功しないんだ、何か別にしつかりした身をたてうる職業をもて』なんて言うんです。わからないんだ……」そして親爺が肺活量なんかも医学的にしらべてもらつてやれと云うがあればそんなもの問題じゃなくて、息の継ぎ方のコツを覚えれば何でもないんだと自信ありげに話す。彼のこの時の態度にもまなざしにもどうして僕を認め理解してくれないんだと云う憤りに似たものがない

じんでいる。

I 「先生ね、あなたがそうして一生懸命専門書などをよんでいるのを見ると必ず伸びる、成功するつて言う感じをうけるんだけど、ね、折角ここまで漕ぎつけたんだからやるならやるで徹底的にやらなければうそよね……」そんな話から彼は一生をかけてやつて見せると誓い、私が音楽が好きだと言つたとともに喜びジャズの話をいろいろ聞かせてくれ、ロック・アンド・ロールはわからぬが他のものなら何でも耳を貸すと言つと大声で高らかに笑つた。

I 「ねA君、あんた亡くなつたお母さん覚えてる？」

A 「一寸改まつて」「ええ、ううんとたしか小学校四年の時に死んだんです……」半身不随になり七年位患つて死に後は父の手で育つた事を話し、父が再婚してくれた方がよいと云う事も仄めかす。

I 「お父さんはね、誰か子供を産んで育てた人がよい、おばあさんでもよいと云つてらしたわよ」

A 「僕はお婆さんよりやはり親爺に似合つたね、やつぱりそんな年寄りでない方がいいと思うなあ……あいつは貰わぬから尚一層当り散らすんだと思うんだけど……」本児は妻なきあと一人で通して来た父のフ

ラストレーションを感じとつていらしく大人びた口調で言つて少してれた。灰皿をジツと見てる。

I 「A君煙草は？ 吸つてるならどうぞ私がかまわないよ」シメタノと云う風に笑つてポケットをさぐり忘れて来た事に気が付いたらしい。話せると思つたのか足を組みかえて、少しくつろぎ乍ら、母にはそんなに執着してないこと、寂しいとひどく思つた事もないと云う事、父は一たん良いと思つたらいつまでもそう思いつづけ、悪いと思うといくら対象が改まつても悪いとして意見の訂正をしない事をすつと話しつづける。話の跡切れた時、

I 「お父さんは又こちらにいらつじやるからよくお話して君がバンドマンになりたいつて云う事も話して納得していただこうね、でもやつぱりガムシヤラに衝突して一人で沈んで行くよりも、まずよく話して自分を理解してもらつ努力をする事もさ、自分の意志を通す為の一方方法だしね……どうかしらよく考えて見て……」彼はたしかに自分もそう思うと云い、その点弟Nはうまく立ち回るから得なんだと言う。今度楽器もつて遊びに来るなどと言つて丁寧に挨拶し、クレベリン検査もすすんで受けると言つて室を一緒に出る。

ケ
ー
ス
記
録

四年 齋藤裕子

児童名 Y・K 年齢 14歳 (昭和17年6月8日生)

本籍 K園K 現住所S区S町

学歴 ××中学二年在学中

家族

実父	実母	長兄	次兄	姉	弟	妹	妹	妹
W・K	M・K	I・K	I・K	E・K	Y・K	M・K	M・K	M・K
58	56	26	24	23	11	8	5	
小卒		中卒	中卒	中卒	小学生	小学生	小学生	ナシ
生活保護	製紙会社員(住居共にせず) 自動車会社工員 自動車会社電話交換係(住込み)							
職								
業								

通告者 Y警察署
種別 窃盜

A 取り扱つた理由

本少年は窃盜性癖を有し、29年来より18回にわたつて窃盜行為をしたもの、それ故に保護者に施設收容をするように話したが、引取後は宗教団体幼少年部に通わせ修

養させるからとの理由で拒絶した。だが昭和31年11月現在に至るもなお矯正出来ず、M指導者より保護者の納得を依頼されたものである。両親又特に二兄が日蓮信心の為に少年院と施設との関係を誤解しているらしく難問のケースとの事である。一応前書類を調査の上面接をする。

B 面接経過

11月22日午後4時H・S町下車家族訪問
一軒家であるがバラック建て、周囲はふすままでかこつたり、板を立てかけてある。

まだ4時頃と云うのに、奥は薄暗く電氣をつけている。丁度玄関の突き当りが台所らしく薄明りの中で、鍋釜が見え、とても台所と見えぬ位不潔である。妹の「お客さん

よ」という声に母親がふすまから体をのり出し「何でしょうか」と云う。訪問の旨を話すと「Ｙはまだ学校から帰つて来ませんが4時30分頃には帰つて来ます。本当にいつもお世話になつて」と愛想を云い、妹の方に向つては「表に出ときなさい」と叱りつける。Ｙ君の現況を聞く、「ええ今の所落ちついていいんですよ」と答える。「それはいいですけど、11月2日S町でなかつた事御存知ですか」とそろそろ話しはじめると、その事なら知つていとうなずきながら、「警察の方から知りまして、どうしてあの子だけあなんでしょうか。へそをまげらんですよ、あれがなければとても良い子ですがね」と世帯やつれた顔を手でなでる。「兄弟との仲は……」と尋ねると兄弟で本児の様なはいない皆本児の事を心配していているといい、「そりや、兄弟同志ですからたまには喧嘩もやりますけど、普通ですよ」とうなずく。両親に対しての本児の態度は「叱るとへそを曲げらんですよ。あの事を注意すると自分だけいじめると思ふんですね、だからなるべく叱らない様にしてあるんですよ」と答える。そして多分あの子があのようになつたのも父親が病気で入院

し、そのため子供の面倒が見てやれず、姉まかせにしていたからだろうと一人てしやべり出す。学校友達の事について尋ねたが先生もよく面倒をみてくれるし、友達も今頃よくなつてゐる。一時はよく学校から帰つて来てもすぐ家を飛び出していたが、最近はおとなしくしてゐると答える。

さてそろそろ肝心の所にふれて行かねばと思ひ、「前にM先生よりお話があつたと思ひますが、いつも家庭でよくするとおつしやるものですからその様にして来たんですけれど、この間も又さうでしよう。如何ですか」と少々こちらから話をきめつけていた。それに対し母親は来たかといつた表情で顔をこわばらせた。それでもええとうなずきながら「今はＹも落ちついていまして今度は××の青年部に入れて教育してみます。でももし今度悪い事をしたら施設に入れてもらいます。信心すればきつとなおおと思ふんですよ。かえつて施設に入れてへそをまげられてはね。Ｙもこれからは悪い事を絶対にしないと云つていますから、ええ青年部に入れてみます」とハッキリ力をこめて語る。その時隣のふすまから男の声で何かこちらに向つて怒るような

声を投げかけるが何を云つてゐるのかわからぬ。多分父親だろうと推定するがそれに対し母親は何ら受け答えしない。どうも施設そのものを誤解してゐるらしいので説明にかかるとそれはM先生からもよくうけたまわつてゐますと受け入れない。もうその時4時30分にもなつていたのでＹ君も帰つて来るだろうからと云い腰をすえると母親は妹を呼び兄を呼んでこいと云う。するとものの三分もしないうちに本児が自転車以後に荷かごをつけて帰つて来る。「どこに行つてたの」とたずねると寒そうに肩をすくめ、ポケットに手を入れ、げんそつうにこちらを見る。可愛い顔をしてゐるなと思つてゐると、母親が「顔だけ見ると悪い事をする様には見えないでしよう」と云う。案の定それに対し子供はぶつとし、顔をそらした。「今まで何をしていたの?」と本児にたずねると母親が学校から帰るとすぐ野菜うりを手伝いに行くのだと先程はそんな事を一度も口に出さなかつた事を云う。

一五〇円もらつて何に使ふかを尋ねると母親をあごで指し「ぜ、ぜんぶ出す」と吃りながら云う。「ね、この前の日に又と

つちやつたの」と云うとアツとした顔を
し「ししらない」といい、見る見るうち
に顔をゆがめ今にも泣き出しそうにする。

これは大変な事になつたと思ひ急いで映画
の話しに切り換え、錦之助や千代之介の話を
するとその顔もすぐほころびニヤニヤとす
る。学校の事を聞くと「柔道部に入つてい
る。クラブ活動でやつている」と始めて
自分から答えてくれたので、「ホウいいわ
ね、柔道部もあるの」と云つてやると肩を
ゆるがせながら、スーと鼻汁を吸い上げ得
意そうにする。その時母親が彼の袋から本
を取り出させ私の見える範圍にそれをソッ
とおいた。見ると日蓮大聖人と書いた本で
ある。「へえそんなもの読んでいるの、わ
かる？」「ううん、わ、わかんない半分ま
でしか読んでない」と云う。母親はこれ
の通り家では教育をしているのだと云わぬ
ばかりの顔をし本児を見てニコニコ笑う。
さて何気なく施設の話をして見ようと思ひ
「ね、前にもM先生が施設に入つたらとお
つしやつたの、行つて見ない？ 沢山のお
友達もいるし、学校もあるし、この間、チ
ョット私も行つて見たんだけど（まだ施設
見学もしていなかつたが）面白そうだった

わ、ね今度一緒に行つてどんな所か見て来
ましようか」と話すと、本児は母親の顔を
みながらわからないと口をとがらし答え
る。「青年部に入つた方がいい？」と聞く
と気乗りなさそうに「うん」と答える。又
とたんに隣りのふすまから「これから悪い
事をしませんから今度だけは許して下さい
と云え」と怒る様になる。すると本児は
見る見るうちに顔一杯怒りに満ちた表情を
呈し「嫌だ」ときげび、つと庭の方にはな
れてしまつた。本児に話をしてゐるのに横
から話をまげ、困つてしまつたと心配して
いた所、又もどつて来てくれたが今度はこ
ちらに脊を向けてセーターを頭一杯かぶり
坐る。「そんな事云つてるのではないのよ、
とても良い所に見えたから、一緒に見るだ
け見て来ましようかと云つただけよ、じゃ
又その内にくるから皆と相談しなさいね、
しつかり勉強もするのよ」と帰り仕度をす
るところを向いて「さようなら」と云う。

相当頑固だわ、どうすれば納得させる事
が出来るかと思へながら20歩ばかり歩い
て来る。どこに行つてゐるかを聞くと野
菜うりを手伝つて来るのだと云いながら自
転車を降り、並んで歩く。「ああそうね、よ
くうれる？」「うん」とうれしそうに笑う。
丁度大通りに入る道と路地の方に行く道
があり、私は大通りに出ようとしたが本児
は路地の方を選ぼうとする。「そつちの道
もあるの？ そつちの方が近そうね、私もそ
つちから出よう」と私も路地の方に行く。本
児が私を避けようとするならあとから出か
けるはずだと思ふのは私の欲目だろうか。
私も一方の自転車のハンドルを握り本児
と歩きながら「××の青年部つてどんな
所？ お説教をしてくれるの、面白？」と
たずねると「何にも面白くない、わからな
いもの」と云う。「家で施設に行くの誰が
反対するの、お母さん？ 兄さん？」と聞く
とそうだ、兄さんもおこるのだと答える。
そして今度始めて、本児から質問をうけ
「施設つてどこにあるの？」と云う。さて困
つた。先刻は行つて見ても面白そうだった
と云つたがと急いでパンフレットを出し、
「ここよ、仲々きれいでしよう。中央線で行
つてね日下車するの」と苦勞な答えをす
る。「ホラ君、この近くのT少年院知つてい
るでしょう。あれとは違ふの、あれは本当に
悪い事をして、そこに送られるのだけど日

施設はYチャンと同じ様な子が本当によく
 なるうとして入つて行く所なの、先生もと
 てもやさしく、親切に面倒を見てくれるの
 よ」ともう一度説明すると「行つて見たい
 なあ」と云う。「そうじゃ行つて見ましょ
 うね、家の人にも話をしなさいね」とい
 うとニコニコ笑う。今迄とぎれとぎれの会
 話であつたのが自然に吃りの方もなつて
 いる。親しみ深く笑いながら話をする。全
 然態度が母親のいる時とは異つてい
 る。

路地をぬけ大通りとなつたので何処で売
 つているかを聞けば、露店の野菜売りや他
 の売り店とならんだ一つの野菜うり屋をさ
 す。

一人の若者が大声で「奥さん、どうです
 か、安売りますよ」と叫んでいる。兄さん
 なのかとたずねるといやあは店の人だと
 云う。

「じゃしつかり手伝つてね、又今度」とハ
 ンドルを握つている手をポンとたたいてや
 る。本児はにこつと笑い、大声で「さような
 ら」と云う。やはり本児にも問題はあるが、
 家庭そのものに原因がある様に見える。ど
 うすれば納得出来るかを考えながら帰途に
 ついた。あたりは暗く六時に近かつた。

実習生委託施設

(昭和三十一年度)

世田谷福祉事務所	賛育会病院
台東福祉事務所	国立神奈川療養所
中央児童相談所	渋谷保健所
台東児童相談所	麴町保健所
杉並児童相談所	目黒若葉寮
北児童相談所	愛隣団ホム
立川児童相談所	東京育成園
品川児童相談所	石神井学園
児童福祉司水野鶴代氏	国立愛光女子学園
同 並木美代氏	東京保護観察所
国立精神衛生研究所	東京家庭裁判所
国立第二病院	神田橋女子公共職業安定所
日本赤十字社中央産院	本年度は以上廿六カ所の実習先に
聖路加国際病院	五十名の実習生を委託した。